

ギニアの「森の島」

1. 地域の概況

西アフリカ、ギニア共和国のキシドウゴウ県は、サバンナ草原に落葉性広葉樹の森がパッチ状に分布する地域である。人びとは湿地での米栽培、キャッサバや落花生などを栽培する半集約的移動耕作農、牛の飼養、狩猟採集などを組み合わせた生業を営んでいる。この地域に島状に点在する森の多くは、集落周辺にある。多くの研究者や行政官が、この「森の島」を、かつてこの地域を覆っていた広大な湿潤林の名残であり、近代化と人口増加が森林劣化の原因だと考えてきた。しかし、Fairhead and Leach [1996]の調査により、島状に分布する森は集落の周りに人びとが作り上げたものであることが明らかになった。

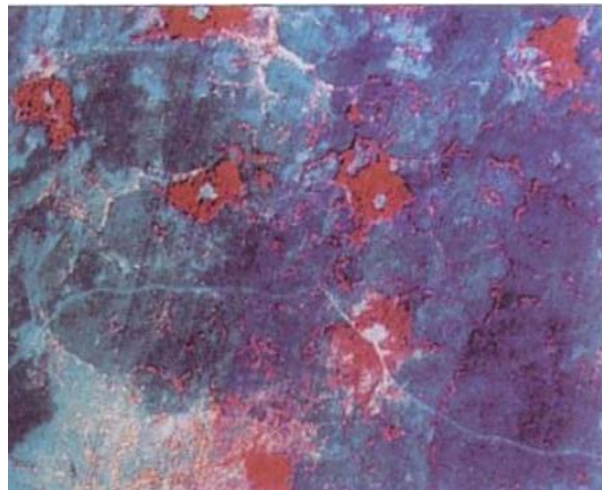


図 ギニア共和国、キシドウゴウ

2. サバンナに森を創る人びとの営為

この地域では毎年のように、大規模な野火が起きる。野火から、村、家畜、農地を守るために人びとは居住域の周辺に森林を作る必要があった。村人は集落周辺の草丈の高い燃えやすい草を刈り、露で湿っている間に火をつけ、低い温度で野焼きをおこなった。そうすることで野火の延焼を防いだのである。

また、家畜の糞、灰、調理の廃棄物などを用いたマルチングやマウンド農法を通じて、集落周辺部に有機堆積物がつくられていった。これにより、乾燥しにくい柔らかい土壌が形成され、樹木の種子の発芽・成長が促進された。また、耕作により燃えやすい草丈の高い *Andropogon gayanus* が除去され、より草丈が低く、燃えにくい *Pennisetum violaceum* や *Hyparrhenia spp* などに置き換えられた。これにより、野火による延焼が受けにくくなった。またその他にも、次に生えてくる陰樹に日陰を提供するため、意図的に耐火性パイオニア樹種を移植したり、経済的に有用な樹木を植栽したりした。これらの人為を背景として、集落周辺には比較的密閉した半落葉性の森を創られていったの



写真「森の島」

出典：Fairhead and Leach [1996]

である。

ギニアの森の島は、人為が加わることで作られたまさに里山である。生物多様性の低いサバンナに創られた森は、この地域の生物多様性を高める上で重要な役割を果たしてきたと考えられる。

出典: Fairhead, J. and Leach, M. 1996. *Misreading The African Landscape: Society and ecology in a forest-savanna mosaic*, Cambridge University Press, 354 pp.